

栄光学園創立者による自筆メモと戦後の教育

－ 教育の目的と期待される教師像 －

大野 邦夫[†]

[†] 株式会社 モナビIT コンサルティング

[†] E-mail: k-ohno@star.ocn.ne.jp

あらまし 先に栄光学園創立者、グスタフ・フォス校長が晩年に記した自筆メモに関して紹介したが、その内容における教育の目的、理想的教師像の模索、教育分野における戦後日本の歴史に関して分析・考察した結果を紹介する。フォス校長は教育の目的を、時代や国境を超えて社会的に通用する人間、要するに自立した社会人の育成と考えたが、立身出世を目指す受験教育が国民に浸透し、フォスさんが目指した教育の理想からはかけ離れた状況であった。戦後の日本の教育は占領軍の改革により民主化されたが、日本の独立と共に文部省と保守的な政治権力により戦前と同様な国家主義的な教育に戻りつつある。受験勉強と教育の右傾化の中で、現場の教師はサラリーマン化し、無気力になっている。そのような状況に対して、フォス校長は自筆メモを通じて自問自答しつつ、日本の教育を考察している。

キーワード 教育の目的、理想的教師像、戦後教育、受験教育、バートランド・ラッセル、デイヴィッド・リースマン、永井道雄、石川達三

Written Memos by the Founder of Eiko Gakuen and Postwar Education

－ Purpose of Education and Expected Personality of a Teacher －

Kunio Ohno[†]

[†] Monavis IT Consulting Co., LTD

[†] E-mail: k-ohno@star.ocn.ne.jp

Abstract In this paper, the purpose of education, ideal teacher, and postwar Japanese educational history in the written memos by Principal Gustav Voss, Eiko Gakuen founder have been described. He believed that the purpose of education should be to develop independent person in the society. However, exam education for career advancement which has become widespread among the people, prevented the purpose. Japanese education after the war was democratized due to reforms by the occupation forces. After the Japanese independence, the Ministry of Education with conservative political parties has returned to the similar nationalistic education as before the war. As the education of exam preparation and nationalistic shift to the right, teachers have become salaried employees and lethargic. The handwritten memos of Gustav Voss was the document asking himself questions about such situations.

Keywords purpose of education, ideal teacher, postwar education, exam education, Bertrand Russell, David Riesman, Michio Nagai, Tatsuzou Ishikawa

1. はじめに

本報告では、栄光学園創立者のグスタフ・フォス校長の自筆メモの内容を、教育者・教育事業家としての活動経緯から考察・検討する。2022年の年次大会のDMH研究会のセッションで、自筆メモが発見された経緯や、その内容をDTPシステムを使用して分類し、それをXMLでタグ付けする手法について紹介した[1]。さらに年末の第4回DMH研究会の報告[2]で、XML化されたフォス校長の自筆メモ内容の詳細を具体的に紹介した。以上に基づき、本報告ではフォス校長が指向した教育の目的と期待される教師像について、日本の戦後教育の歴史を踏まえて検討を試みる。

先ず2章で検討の進め方について述べ、3章でフォス校長が考えた教育の目的について取り上げるが、その思想を分析するにあたり、一般教育と職業教育の対比、個人の自立と

組織への貢献などを検討する。4章では期待される教師像を取り上げる。中教審・文部省が期待する教師像が存在するが、それが日本社会では受け入れられない状況が存在する。その状況下で、サラリーマン教師が蔓延している中等教育の実態をフォス校長は問題視する。その状況を受験教育との関係で考察する。

5章では、教育分野における戦後日本の歴史を取り上げる。敗戦で打ちひしがれた戦後の日本の教育再建を占領軍は考えたが、栄光学園の創立もその一環であった。占領軍による日本の民主化政策により教員による労働組合として日教組が組織化されたが、政府・文部省と対立し時代を経て衰退した状況を述べるが、日本の家庭で親が受験教育で過熱する中で、政府の政策が教育現場を混乱させた。その状況の中で栄光学園は名声を高めたが、それはフォス校長が意

図したものではなかった。最後に以上の問題を総括的に考察する。

2. 検討の進め方

2.1 先の検討の経緯

先の報告[2]で、フォス校長の手書きメモの章(2章)を下記の10項目に区分して報告した。

- (1) 教師の政治活動(2.1節)
- (2) 教員養成と教師の質の向上(2.2節)
- (3) 家庭での教育の重要性(2.3節)
- (4) 教育の原点(2.4節)
- (5) 国家と教育(2.5節)
- (6) 戦後教育の甘やかし(2.6節)
- (7) 教師のチームワークで自立教育を目指す(2.7節)
- (8) 日本の教育の問題:自立より受験(2.8節)
- (9) 日本におけるカトリック教育(2.9節)
- (10) 肩書や学歴でない良い人間の育成(2.10節)

さらに以上の10項目を概念的に分類することを試みた。それらを、

- (A) 理想的教師像の模索(1・2・4),
- (B) 教育の目的(3・4・5),
- (C) 教育分野における戦後日本の歴史(1・5・6・8),
- (D) 異文化と教育(7・8・9),
- (E) 今後の展望(7・8・10)

の五つの分野で考察した。

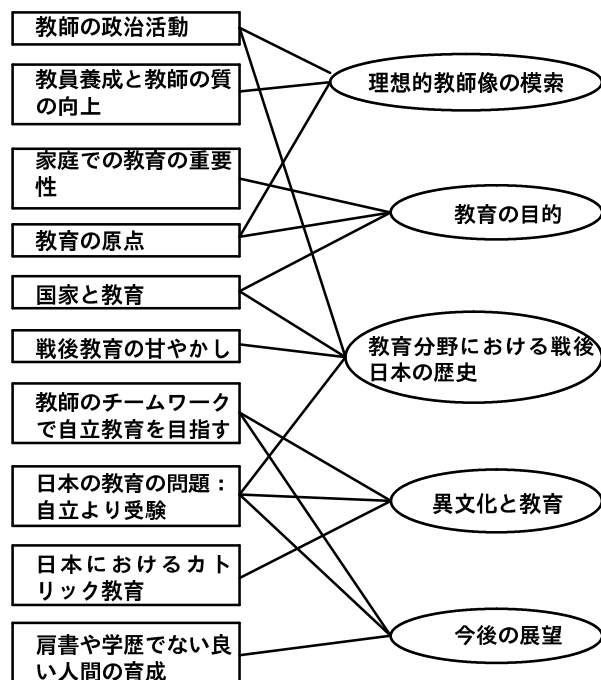


図1 フォス校長のメモ内容の総括的分析

2.2 分類の考え方

以上の分類について説明する。例えばオブジェクト分析設計の考え方に基づくと、1~10の概念(クラス)を継承する副次的概念(サブクラス)として、A~Eの概念を用いると言える。1~10の具体的内容に比べ、A~Eは抽象的であ

り、サブクラスではなくスーパークラスではないかという疑問を持たれる方もいると思う。分類・分析のフェーズの場合はそうであるが、統合・設計のフェーズでは、部品を集めて装置とするので、サブクラスの方が抽象度は上がることになる。この辺りは、意味的クラス継承について考察した文献を参照して頂きたい[3]。

1~10のクラスを多重継承するサブクラスとしてのA~Eのに関する関係を図示すると、図1のようになる。左側の矩形の内容が、フォス校長の執筆内容であるが、右側の楕円は、その内容を概念的な流れとして把握するために、総括的に抽象化した。「理想的教師像の模索」→「教育の目的」→「教育分野における戦後日本の歴史」→「異文化と教育」→「今後の展望」という流れになるが、一挙に全体を総括するのは無理があるので、前半と後半に分けて考察する。その場合「理想的教師像の模索」、「教育の目的」、「教育分野における戦後日本の歴史」を前半とし、「異文化と教育」、「今後の展望」を後半とする。そのように考え、この報告では前半について検討を試み、後半については次の機会に考察する。なお、「理想的教師像の模索」は、一般論としての「教育の目的」の後の方が妥当と思われるので、順序を入れ替えることにする。

3. 教育の目的

3.1 自立することの重要性

教育の目的は、文化的背景や歴史的な経緯に応じて異なると思われるが、それでも時代や国境を超えて社会的に通用する人間、要するに自立した社会人を養成するという点に関しては本質的・普遍的と思われる。この点に関しては、フォス校長の自筆メモの中で記されている。

フォス校長は、著書の「日本の父へ」(図2)の中で、薫陶を受けた父親のことを冒頭の第一章に記しているが、その中に「自立へのしむけから」という節があり、その中で象徴的な次の発言を紹介している。「お父さんは、中学生に



図2 ガスタフ・フォス校長と著書の日本の父へ[4]

なったお前をもう教えることはできない。自分でやるほかはない。自分でやるんだ。」[4] これは将来に成長に伴う自立を要求するもので、フォス校長にとって自立の出発点になったと思われる。従って教育の目的は、社会人になる以前の若い青少年を、自立させる乃至は自立するように意識付けさせることがフォスさんにとっての教育の目的であった。そのために、フォス校長が発するメッセージには常に自

立の重要性が述べられているが、それはこの父親からの言葉に拠ると思われる。

3.2 一般教育と職業教育

自立した社会人になるためには、職業を持つ必要がある。私は晩年に職業能力開発大学校（職業大）で、職業訓練指導員を目指す教育者の育成のための専門教育を担当したが、教員仲間の人たちを通じて職業訓練の重要性を認識させられた。すなわち人間が社会的に生きるためには、職業を持つことが基本であり、それが職業倫理の基礎なのである。要するに「働かざる者食うべからず」であり、これは新約聖書のパウロの書簡の言葉である[5]。パウロ自身、テント職人としての職業スキルを有していた[6]。このように、職業教育の重要性は、西欧キリスト教文化における重要な背景として位置づけられている。

他方、職業教育を行う以前に読み書きそろばん的なリテラシー教育が必要であり、これが初等教育である。日本では中等教育の前半（中学）までが義務教育としてのリテラシー教育で、高校以上はリテラシー教育の延長としての一般教育と職業教育である。日本では中等教育において職業選択を行わせないで、一般教育で優劣を競わせることが受験教育に結びついている。この受験教育が日本の教育を歪めている元凶であることをフォス校長は指摘する。

フォス校長は、父親に勧められて大学への進学を目指すギムナジウムへ入学したが「落第したら終わりだよ。勉強が辛いというなら、石炭を掘ることだ!」と言われていた[7]。このように欧州では現在に至るまで、教育と職業は密着しており、米国や日本のように一般教養教育を指向している訳ではない[8]。

3.3 組織に奉仕するための教育

教育の目的を、自立した社会人を育成することと考えると、それと異質な教育は権威・権力・組織に奉仕するための教育である。

例えば、国家のための教育や宗教団体による布教のための教育が挙げられる。国家のための教育は、教育勅語や修身教育が象徴する戦前の日本の教育であるが、これは日本を軍国主義に導いた元凶として占領軍から明示的に否定された。だが戦後の保守勢力は、戦前の教育を懐かしみ、戦後の教育を戦前的に戻す意向を有し、それが戦後制度化された民主教育と鋭く対立して教育を混乱させている。



図3 バートランド・ラッセルと著書の教育論[9]

この戦前の日本の教育についての問題を述べた教育書としては、バートランド・ラッセルの教育論[9]が挙げられる

(図3)．ラッセルは、教育の目的を、個人の自立よりは、組織に奉仕させることに位置づけることを問題視する。その具体的な例として、国家に奉仕することを目的とした戦前の日本の教育と、宗教的な布教を目指したジェズイットの教育を挙げている。ジェズイットは栄光学園の運営主体であるイエズス会であるが、栄光学園の卒業生はラッセルが問題視した双方の教育の関係者ということになる。

ラッセルは、教育の目的は明確化できるものではなく、多様な価値観を共存させ、許容させる必要があることを説いているが、これはフォス校長が提示した自立した社会人の育成と軌を一にするものである。教育の成果は短期間で分かるようなものではなく、教育を受けた当事者が成長して社会に貢献できるまでの時間的な経緯を要することから、軽々しく時の権力者が介入することを戒めている。

ラッセルが日本の教育を危惧した内容は、一世紀前に書かれた「中国の問題（Problems of China）」[10]に詳細に記述されている。この書籍は、ラッセルが執筆した半世紀後の1972年の日中国交回復の時に訳されているが、日本の歴史をニュートラルな視点で記述していることに印象付けられる。富国強兵、殖産興業を目指した日本の近代化に、明治政府が政教一致の教育を強行した経緯が綴られている。戦後の日本の教育が、社会人としての自立を目指す教育と、国家に奉仕することを目指す教育との対立の狭間で混乱が継続していることが、日本の教育が置かれた状態であった。フォス校長の自筆メモの内容も、将にそれを反映している。

3.4 孤独な群衆と社会的性格

ハーバード大学の教育社会学者であったデイヴィッド・リースマンは、工業化に伴う社会的性格の変化を分析している。彼の名著である「孤独な群衆」[11]（図4）によると、近代国家における社会変化プロセスを、工業化以前の農業を中心とする伝統指向社会から、工場が生まれ都市が形成された内部指向社会へ、さらに大都市を中心に情報メディアによる広告・消費者文化が生まれた他人指向社会へと向かう必然的な変化と位置づけている。

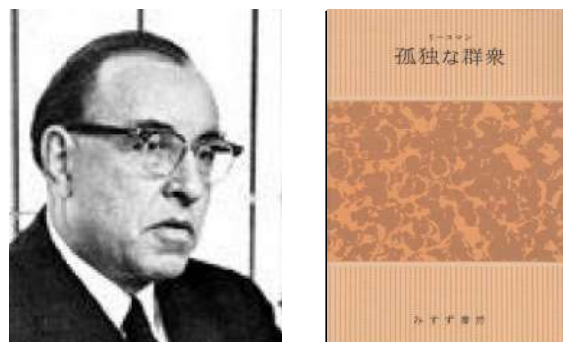


図4 デイヴィッド・リースマンと著書の孤独な群衆[11]

他方、歴史的推移に伴う社会変化を通じても不変な社会的性格についても触れている。それは適応型、アノミー型、自律型という3種類の型である。適応型はその時代の社会に適応する人々の性格で、社会変化に伴う価値観や政治権力に対して従順に従う性格である。アノミー型は社会に適応できない精神異常者や犯罪者である。自律型は、社会に適応

しつつ、社会的な矛盾や問題を認識・把握し、改革を指向する社会的性格である。

リースマンは、社会の変化や進歩は自律型の人々によって行われることを指摘し、自律型の人材の育成の重要性を指摘する。このリースマンの指摘は、「自立した人間の育成」を主張するフォス校長の思想と相通じる面がある。

3.5 自律と自立

自律と自立は、同じ読みであるが、意味は若干異なる。自律は自己を律するという意味から、精神的・心理的・性格的な心の内面を問う言葉であり、リースマンが問題にする社会的性格に対応する語彙である。他方、自立は、他者に依存せずに自分で立つということから、行動や活動といった外面を対象とする語彙である。とは言え、内面の自律が無ければ、外的な自立した行動や活動はあり得ないので、同義語に近い同音異義語であり、同音類義語と言うべき関係になる。フォス校長が執筆した「日本の父へ」[4]と「日本の父へ再び」[12]の趣旨から明らかなように、フォス校長は家庭における自立のための教育を重視した。自立教育のためには、その行動規範の内面化のための自律教育も必要になり、それはリースマンの自律型のための教育と言えるであろう。

フォス校長はその思想を父親の薫陶から獲得したが、その時期は工業化初期の伝統指向から内部指向に移行する社会的性格の時代であった。フォス校長が戦後の日本で栄光学園を創設し運営したのは、工業化を達成した後に、マスメディアが発達し始めた内部指向から他人指向に向かう時代であった。今日の社会は、リースマンが指摘していないインターネットというパーソナルメディアが台頭しており、テレビやマスメディアが主流であったかつての他人指向とも異なる時代となっている。従って、フォス校長の思想も、その当時の社会的性格を前提に分析し、それを今日の状況から評価する必要がある。

4. 期待される教師像

4.1 サラリーマン教師

理想的な教師像の探求は重要な課題であるが、社会的な合意を得るのは困難である。このことは、ラッセルが教育論で多様な価値観の許容を主張する通りである。フォス校長の自筆メモのノートに、木川達爾という文教大学の教授が書いた、「期待される教員の資質・能力」という図5に示す記事のコピーが収録されていることは先に紹介したが[2]、それによると中央教育審議会(中教審)が下記の6項目を文部大臣に答申したと記されている。さらにこの内容は、誰よりもまず、校長・教頭が思索し教師を生かす指導に当たることが望まれるとのことである。

- ・教師は広い教養を持つことが期待される
- ・教師には豊かな人間性が求められる
- ・子供に対する深い教育的愛情を持つ教師が期待される
- ・使命感に燃える教師が期待される
- ・教師には優れた指導力が期待される
- ・子供との心のふれ合いを持つ教師が期待される

一般論としては尤もな内容かもしれないが、それを実行に移すためには、さらに具体的な行動指針にブレイクダウンする必要がある。その具体的な指針が、国旗を崇め、君が代



図5 中教審の指針が記された雑誌記事

を起立して歌うこと等では、自分の良心に忠実たんとする教師にとっては困惑させられる状況が生じる。

以上の状況では、自由に意見を述べるよりは、組織の指示に従えば良いと思う教師が主流になるであろう。そのようにしてサラリーマン教師が出来上がると思われる。ラッセルの教育論からすると、文部省の多様な価値観を認めない教育方針こそ問題であり、戦前の日本の教育を批判した内容と同一の文脈で戦後の日本の教育もラッセルに批判されることになる。リースマンの孤独な群衆の立場では、サラリーマン教師は権力に迎合し、自律的な行動を取らない「適応型」である。戦前の教育が教育勅語に基づく強制的なものであり、それが軍国主義をもたらしたという批判から、戦後の新教育制度が占領軍により導入されたが、それが徐々に形骸化したのが戦後日本の教育現場と言える。

フォス校長は、日教組を中心とする政治活動や労働運動がサラリーマン教師を生み出しているという見方をしているが、それは一面的である。サラリーマン教師が日本の教育を駄目にしていくという点の指摘は妥当であるが、何がサラリーマン教師を生み出したかが問題なのである。

4.2 職業大時代の高校訪問の経験

私が教育の仕事に関係したのは、2007年から2011年までの4年間の職業大での教育であり、その後2015年までは職業大の進路指導委員会顧問として、通信業界への卒業生の就職口の開拓などを支援した。その間に、現場の高校教員と接触を持ったことがあり、興味深い経験をした。

例えば2009年と2010年の夏休みに、翌年の入学志願者の勧誘のために高校訪問を行った。私が担当したのは神奈川県東部の、2年間に30校余りの高校を訪問した。神奈川県東部というと、川崎、横浜、横須賀、鎌倉、藤沢といった首都

圏の高校が対象になるが、私立の一流受験校、県立高校、市立高校、私立高校、工業高校といったカテゴリ分けをして、なるべく多様な高校にアプローチしてみた。

まず、私立の一流受験校では、殆どアポが取れなかった。職業能力開発総合大学校と名乗った途端に、「そのような希望者はいない」と断られるか、「担当が席を外している」ということで取り合ってもらえなかった。県立高校の場合も、それに近い対応であったが、面会できる場合は、推薦入学に関する情報に関心を持つ進路指導担当教員が多かった。市立高校、私立高校は比較的まともに対応してもらえた。最もていねいに対応してくれたのが、工業高校であった。磯子、神奈川、鶴見、サレジオの4校を訪問したが、進路指導担当の教員は生徒のきめ細かい情報を持っており、関心を持って私の話を聞いてくれた。

以上から推察されるのは、偏差値に基づく高校教育の大学受験予備校化とも言うべき状況である。私立の一流受験校、県立高校は、一流大学を第一志望にする人ばかりで、そのための受験テクニック教育に注力しているように感じられた。進路指導担当の教員も、進路指導の目的が大学入試なので、職業大は関心外と思われた。その点、市立高校、私立高校には関心を持ってもらえたが、偏差値が低いのと以前の商業高校を母体とし、高卒で就職する卒業生も存在することから、進路指導の教員もしっかりした人物を担当させているように感じられた。工業高校も似た状況であるが、普通高校よりも工学分野における実験や実習の教科が充実し、卒業して即戦力になり得る教育を行っているので、職業大のシラバスとの整合性が良い。現に職業大の学生でも工業高校出身者は、実験テクニックや技術的なセンスが優秀な学生が多かった。

以上は、進路指導の教員との対話を通じた個人的な印象であるが、受験校になるほどサラリーマン化した教員が多いように感じた。先に3.2節で、職業教育でない一般教育で生徒を競わせることが受験教育を生じさせている懸念を指摘したが、高校訪問に基づく上記の印象は、将にその懸念が符合するよう感じられた。

一流受験校が、職業大に関心を示さない理由はそれなりに理解できるが、進路指導の先生方がどのように考えるのかを知りたいと思い、栄光学園にもアポをお願いする電話をかけてみた。その場合も、職業関係の大学を希望する人はいないとのことで、即時に断られたのであったが、12期の卒業生であることを伝えたら、訪問の機会を頂けた。面会して職業大の紹介を行い、栄光の教育に関しても雑談する機会を頂いたが、在籍した頃から半世紀を経ているので、田浦でのフォス校長の時代とは異質な、多様な保護者の意向に配慮する一流大学受験指向の文化を感じさせられた。

4.3 受験教育がもたらすサラリーマン教師

受験教育が、自立した社会人の育成という本来の教育を歪め、偏差値のような統計尺度で評価する教育方針が組織に順応するサラリーマン教師を育成しているように感じられる。最近では、高等教育までもが、良い就職口を得るための就職予備校的な色彩が強くなり、自立した社会人の育成よりも、組織に順応する適応型の人材育成の場になり下がった感がある。

フォス校長は、受験教育を盆栽造りに譬え、「点取り親がつくるボンサイ」というタイトルで著書の「日本の父へ再び」で紹介していることは既に述べた[1]。さらに日本の戦

後の教育が、戦前の国家のための教育の「国家」を「社会・経済」に置き換えたに過ぎないことを指摘している。フォス校長の指摘は、極めて適切と感じる。日本の家庭が、子供の教育のために良い学校に入り、良い就職口を見つけて安定した恵まれた生活を営むことを期待する。他方、日本の政治権力や社会全般が、経済発展を通じて生活水準を向上させることを目指し、そのために教育制度を政府主導で効率化・最適化することを指向したと解釈することが可能であろう。教育制度を効率化・最適化するためには、個別の異論は不要であり、そのような意見を持つ人物は排除され、適応型ばかりの集団になる。リースマンが提唱した社会を改革する自律型の教育人材が育たず、教育における展望が失われたと見る事が可能であろう。その結果、現場の教師は優れた教育者としてのキャリアデザインを考える余裕はなくサラリーマンとして大過なく過ごすことを強要されるか、組織圧力と教育ママの狭間で、精神的に圧迫され、精神を病んでしまうような状況に置かれているのではないかと思われる。

4.4 期待される具体的な教師像

以上は私の個人的な見方に過ぎないが、そのような状況でも優れた教師は存在し得ると思われる。個人的に栄光学園時代を振り返ると、数学の見山先生、物理の村田先生、国語の境野先生や谷口先生、歴史の金子先生、漢文の菊野先生など、个性的で親切だった先生方を思い浮かべることができる。

グローバルな視点で見ても、魯迅の藤野先生[13]、ドナルド・キーンの角田先生[14]など、教育者として高く評価される日本人教師は存在する。従って中央教育審議会が文部省に答申するような一般論としての理想の教師像を追及するよりも現実に優れた教育を行った教師の事例から、教師像を求めよう方が良いと思われる。そのような発想の原点としては、永井道雄の「異色の人間像」[15]という著書(図6)を紹介したい。

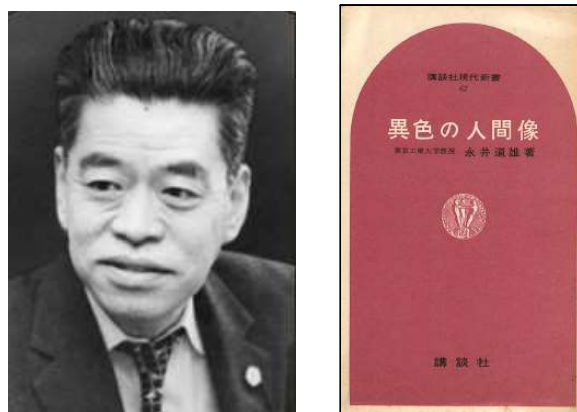


図6 永井道雄と著書の異色の人間像[15]

この書籍は、私が東京工業大学に在籍中に永井教授が担当する「社会学」の授業を学んでいる際に出版されたので印象に残っている。この当時、「期待される人間像」の中間報告が中教審から文部省に答申され、それに対して学者やマスコミから批判が行われていた。そのような状況に対して永井教授は、期待される人間像を一般解ではなく特殊解の事例として、十河信二、安倍磯雄、高崎達之助、松村健三、

角田柳作、幣原喜重郎を挙げて紹介し、戦後の日本が置かれた状況に鑑みて、彼らを超える人材の出現を期待したのであった。

異色の人間像は出版後既に半世紀を経ているが、その内容は現在の日本が置かれている状況にも示唆的な内容を含んでいる。具体的な教師像については、先に述べた栄光学園の先生方や、外国人に賞賛された教師について述べたが、私にとっては永井道雄教授も忘れがたい素晴らしい教師であった。

5. 教育分野における戦後日本の歴史

5.1 戦後の教育改革

戦後日本の教育の大きな問題としてフォス校長が指摘したのは、「点取り親がつくるボンサイ」[16]として比喻した甘やかし受験教育と、聖職者になれない労働者のなサラリーマン教師の問題である。この二つの問題は、戦後の民主化に伴う教育改革が発端である。

占領軍は戦前の日本の軍国主義の元凶は、国家神道と一体になった天皇制を背景に、教育勅語と修身教育を通じて天皇制を国民に強制した政教一致の教育にあったと見做した。そのために、神聖にして犯すべからざる制度であった天皇制を、天皇の人間宣言を通じて象徴天皇制とし、戦争を放棄し、基本的人権を尊重する新憲法を制定して軍国主義を根絶やしにして再生させないようにした。

教育に関しても国家が教育を支配することを避けるために、地方自治を想定し、都道府県の教育委員会が地域の状況に応じた教育行政を行うように制度を改革した。その辺りの経緯については、ジョン・ダワーが詳細に記しており、戦後の日本社会が変革された経緯を知るために彼の著書は必読と思われる[17][18]。

5.2 栄光学園の設立

栄光学園の設立も、占領軍が指向した新教育制度への取り組みの一環と考えることが可能である。フォス校長の著書である「日本の父へ再び」[12]の冒頭に、「廃墟に立ちつくした日」というエッセイが記されている。フォス校長が戦後再来日して二週間後に、イエズス会から田浦に開校予定の中学の校長になることを命じられて、その予定地(図7)を訪れた際の状況が記されている。その状況を引用する。

『廃墟となった旧日本海軍の施設を見て呆然と立ちつくしていると、一台のジープが来て止まり、中年のアメリカ軍人が降りてきた。フォス校長は彼に向かって語る。「ねえ、ひどい、全くひどいことだ。破滅の至りだなあ。」「あなたがここを譲り受けられる方ですか。」「譲り受けるのですか?・・・譲り受ける気持なんか全然ありませんね、このガラクタの山では差し上げますと言われても、欲しくない。私はただ眺めているだけなんです。でも見れば見るほど嫌になるんですね。これはとても学校にはなりませんよ。倉庫ならねえ、立派なものですが・・・。」「それはあなたのお考えですか。私はイエズス会がもっと将来を見る目を持った人を送って来れると思っていたのですが。』」

会話の相手は米海軍横須賀基地の司令官のデッカー大佐であった。フォス校長は初対面の米海軍の司令官に、冗談とはいえ愚痴をこぼしたことを恥ずかしく思ったが、大佐はフォス校長の気持ちを察したようで温かい言葉をかけてく



図7 栄光学園の予定地の荒廃した日本海軍施設

れた。「きょう、こちらへいらっしやることは、東京からの電話で知りました。是非お会いしたかった。よくいらっしやいました、こんな所へ。こんな所へですよ!」

この文章読んで、フォス校長も愚痴をこぼすことがあったことに驚くと共に、この対話が栄光学園創立の状況を雄弁に物語っているように感じた。初対面の人と会って、ユーモアを交えた対話から見通しが立たない困難な仕事を引き受けることを決意する状況は、自立した責任感無しにはあり得ない。フォス校長のこの決断のお陰で栄光学園は存在するのである。

なお、このエッセイの冒頭に、「1947年10月21日は、私にとって生涯忘れることのできない1日である。」と記されているが、1947年の4月に栄光学園は開校しているので、1946年の誤りであろう。自分自身への厳しさを求めたフォス校長もミスを犯すことを認識させられたが、機械ではない人間としては止むを得ないことであり、この本文の内容と共に人間性を感じさせてくれる。

5.3 創立時の栄光学園の文化

有名受験校になる以前の創立当初の栄光学園は独特の文化を有していた。私が栄光学園に入学したのは、私が在籍した横浜市立末吉小学校の校長であった江藤正一先生が、横須賀にドイツ人が経営する厳しいしつけをするユニークなミッションスクールの中学があると教えられ、そこを受験してみないかと勧められたからである。そのようなことから、当時の栄光学園は神奈川県教育関係者には注目され、興味を持たれていたようであった。

当時の栄光学園の雰囲気を知るための興味深い文章を紹介する。これは栄光学園山岳部の部誌「いろり」からの引用で、丹沢ホームの経営者中村芳男さんによる「栄光とわたくし」[19]という文章の一部である。冒頭に丹沢ホームでの日々の生活を紹介した後に下記の文が続く。

『そんな様な生活の続いている或日、麓の秦野町へ降りると、「外人が先生のことをきいていましたよ」と云われた。それがシュトルテさん。あれからもう十年になる、はじめて栄光中学の生徒さんが見えたのはその夏だった。

口の悪い、底抜けの騒ぎかたをする中学生たちだ、と思っていたが、夜の十時になると「ピタリ!」ともの音一つさせない。これには驚いた。「変わってるね!」と云った時にはもう「敬愛」と云う気持ちになっていた。』

シュトルテさんと記されているのは、訓育主任で山岳部長であったシュトルテ神父で、「天狗さん」というニックネームの教師である。さらに中村さんの文章を続ける。

『栄光中学や天狗さん（一寸ゴメンなさい）を知っていると云うことを、長さんや熊さんすら誇りに思うようになっていた。が、その中学生がおのれの先生を「天狗さん！」と呼ぶ。「なんて連中だろう?!」と思ったのだが、試みに自分も云って見た、なるべくご機嫌のよい様な時に――、そうしたら「いけませんよ、あなたまで」ときたが満更でもなさそうだった。

親しめて、礼儀の正しい人々、私共一家（大家族なんだが）は急速に栄光と仲よくなって行った。底抜けに見える栄光の一人ひとりの心につながるあるものを見せつけられた。山の団体行動の時も我々夫婦で感激したものだが、この学園の山男たちにとってはこれもあたりまえのことだったらしい。

栄光で山小屋を建てる！！誰よりも喜んだのがこの山奥にも居る我々夫婦だった。「よい計画だ」と考えた。正式に頼まれもせぬうちに当局の某部長、某課長にお会いした時にその話をしたら「あの学校はいい！」と二つ返事だった。

建てるまでの運びも、建築途上も、みんなが心を一つにして実によく働いた。立坪は40坪そこそこだろうが、これ程好意と善意だけで出来た山小屋は数ないことだろう。みんな利欲に関係なく、土台から天井に至るまで出来上がったのだから。』(図8)



図8 創立時の自立精神を象徴する丹沢の栄光ヒュッテ

丹沢の栄光ヒュッテは1957年に完成したが、自立精神を背景にする創立時の栄光学園の文化を象徴する存在と言える。中村芳男さんが最初にシュトルテ神父と会ったのがその10年前とのことで、1947年のことであるが、栄光学園が設立されたのはこの年の4月なので、開校と同時に夏の丹沢のキャンプを開始しており、フォス校長やシュトルテ神父はこのような課外活動を重視していたことが分かる。

なお以上のような価値観の伝統に支えられた栄光ヒュッテではあるが、建設されて既に66年を経ており、その存続が懸念される状況にある。存続を希望する高齢卒業生の一部が、その保存と活用を学園に要望・交渉している。当事者でない関係者の懐旧の念と思い入れであろうが、フォス校長もシュトルテ神父も教育や訓育の場では、過去に拘泥せず常に前を見据えることを強調されていた。その精神を若い人たちに伝承する必要がある。ヒュッテが自立した社会人

の育成という創立時の精神を象徴するにせよ、その文化を半世紀を経た現在、建物の活用で伝承するのは無理がある。老朽化した設備の維持管理には少なからぬ稼働と費用が生じ、その負担や責任を考えると、栄光ヒュッテの運営は当事者としての現在の生徒・保護者・教職員の意向と判断に委ねられるべきである。

老朽化したヒュッテはいずれ解体せざるを得ないであろう。その時にかつての自立した社会人の育成というフォス校長が目指した精神を在校生や教職員、今後の生徒に傳承していくことが重要な課題である。その精神が引き継がれるならば現存のヒュッテが消滅しても問題はない。OBとしては、物理的なヒュッテの存続よりも、そのオリジナルな精神を傳承することに協力すべきである。

5.4 公選制から任命制に移行した教育委員会

サンフランシスコ講和会議が1956年の9月に開催され、日本の主権が回復され、その翌年の4月に講和条約が発効して独立が認められた。その後、日本は東西冷戦の西側に組み込まれ、平和憲法に関しても国内で意見が対立する政治状況になった。

教育行政に関しても専門職団体として組織化された日本教職員組合（日教組）が、政府・文部省が指向するトップダウンによる全国一律の教育方針に対し、現場重視のボトムアップによる教育方針を主張し対立した。その状況下で、教育への国の関与を強める教育二法案が成立し、教育委員会の公選制から任命制への移行が強行され、米国流の地方自治による教育行政は覆された。

この問題を扱った小説として、石川達三の「人間の壁」[20]が知られている（図9）。この小説は佐賀県で起こった実話を元に執筆され、1957年8月から1959年4月まで朝日新聞に連載された長編小説である。日教組側に立ち、政府や自民党を批判する立場からの小説であるが、学生時代に読んで感銘を受けた。特に現場で真剣に生徒の教育を行いつつ、組合活動を通じて民主主義を護り貫こうとする多彩な教師の姿を認識させられた。

フォス校長がこの日本語の長編小説を読んだとは思われないが、もし読んだならば、労働者の立場に立つ教育者のあり方を認識できたのではないかと思う。



図9 石川達三と著書の人間の壁[20]

カトリックの司祭で日本社会に入って労働者として働き「出る杭はうたれる」[21]という日本社会と日本文化を経験的事実に基づいて分析し、レポートしたアンドレ・レノレ神父のような人物も存在する。この神父の活動はまさにフォス校長が日本の教育に欠けていると指摘する日本社会の底辺における実践である。フォス校長も、このような人物

と接触し、連携することができたなら、労働者としての教師のあり方を理解し、より優れた教育を行えたのではないかと思われる。

5.5 保守と革新の対立

石川達三の人間の壁が問題にした政府・文部省と日教組の対立は、占領軍が導入した民主的な教育を戦前のような国家主導の教育に戻そうとする伝統的保守層と、労働運動を支援し民主主義の重要性を訴えるリベラルな知識人との対立である。要するに保守と革新の対立であるが、この対立が今日に至るまで尾を引いて混乱し、教師のサラリーマン化を通じて自由な教育を妨げ、日本社会の停滞を招いている大きな要因となっているように思われる。

フォス校長が『戦前の国家のための教育の「国家」を「社会・経済」に置き換えたに過ぎない』という指摘をしていることは4.3節で述べたが、このことからフォス校長が

政府・文部省の方針を認めていたわけではないことは明白である。他方日教組への強い批判から分かる通り、労働運動やリベラルな進歩的知識人の立場を認めていたわけでもない。異邦人としての是々非々の立場であったと考えられる。

保守と革新の対立は、教育界では文部省と日教組の対立を招き、政治的には政府自民党と野党の社会党・共産党との対立、さらには産業界と労働団体との対立にまで波及した。この対立の構図は、1950年代から1980年代までは、米ソの対立による東西冷戦の構図を反映して保守と革新の対立が継続したように思われるが、実際には社会主義圏は徐々に衰退し、1989年の冷戦の終結と共にその構造は消滅した。図10は、日教組の組織率の推移を示したもののだが[22]、保守と革新の関係を雄弁に物語り、それが東西冷戦の力関係を反映していたように感じられる。

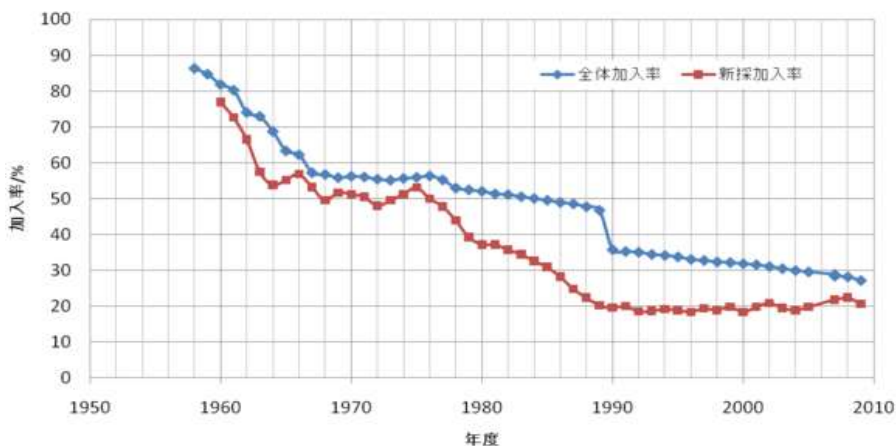


図10 日教組の全体加入率と新採加入率

日教組の組織率のデータは、1950年代の末からのものであるが、当初は90%近い組織率であった。これは、石川達三の「人間の壁」に反映される世相を背景にしている。その後組織率は下降の一途を辿っているが、これは保守勢力の増大と革新勢力の衰退を物語る指標と言えるであろう。全体加入率は、高度成長期の1960年代後半に60%を切り、1970年代以降は漸減して1980年代半ばに50%を割ったが、1989年に一挙に低下して35%程度になった。これは東西冷戦終結の影響であろう。その後も減少し2000年代半ばに30%を割っている。新採加入率の減少は、全体加入率の減少に先行し、若い人たちの組合離れを物語る。教師は労働者であるという思想の敗北と言っても差し支えないであろう。しかし教師は専門家としての聖職者であるという思想が勝ったわけでもない。結局、教師は労働組合に支えられない個々バラバラなサラリーマンになってしまい現在に至っている。

5.6 孤独な群衆による解釈

この状況をさらに巨視的な視点で眺められないかと考えた。その一つの手がかりは、リースマンの「孤独な群衆」に求められる。政治的対立を克服し弁証法的に発展する思想を生み出し得るのは、孤独な群衆が提示する自律型人材に他ならない。しかしながら、戦後の日本は、保守と革新が対立する政治分野や教育分野で自律型人材を生み出せなかったのが現実であろう。要するに適応型ばかりを大量生産し

てしまったのである。この問題は、3.3節で論じた組織に奉仕するための教育がもたらした弊害と思われるが、これは別途考察したいと思う。

自律型とは言っても、伝統指向、内部指向、他人指向の各々の時代に応じて異なる性格・態度・行動になるであろう。伝統指向の場合は、宗教的な文化や習慣の影響が強いで、自律型人材の宗教的な価値観に基づく考えや行動が社会を変革発展させることになる。内部指向の場合は、核家族化した家庭的な影響や教育における優れた教師からの影響が自律型人材の思想や行動に反映され、社会を変革し、発展させることになる。他人指向の場合は、マスメディアや同時代の友人などからの情報で、時代の推移を把握し、その展望に基づく価値観が社会変革や発展に寄与することになる。

フォス校長は、まぎれもなく自律型の人物である。それは父親からの自立の要請をしっかりと受け止め、それを内面化して行動指針としたからと思われる。さらに、父親の影響と言う観点では、内部指向的な自律型であろう。他方、聖職者・宗教家として社会を変革したいと考える点に関しては伝統指向的な自律型という側面も存在する。

キリスト教社会を背景に、孤独な群衆を考察すると、伝統指向はカトリック教会、内部指向はプロテスタント教会に対応すると思われる。リースマンが内部指向の典型として位置づけるのは、米国のピルグリムファーザーズの開拓者

精神を基盤とする人々である。アメリカンドリームの実現を目指し、新たな社会を開拓する人々を連想させてくれる。ハーバード大学のリースマン教授自身が内部指向の自律型の典型のようだが、米国社会の進歩的価値観を象徴するニューイングランドの文化を強く感じさせられる。

翻って日本社会を考えると、内部指向の時代は、戦前の富国強兵・殖産興業の時代から戦争を挟んで、戦後の高度成長から安定成長をもたらした1970年代辺りまでが対応すると思われる。日本の内部指向はプロテスタンティズムではなく、儒教道徳に基づく秩序重視の文化である。それでもアメリカンドリームに対応する立身出世主義が、経済成長を推進したモチベーションであったと思われる。日本の内部指向的価値観については、情報処理学会のデジタルドキュメント研究会で報告したことがある [23]。

欧米におけるキリスト教の背景と、日本における儒教の背景が社会的性格に大きな影響を与えるが、内部指向におけるこの相違は極めて大きいと考えられる。

6. まとめ及び考察

6.1 まとめ

以上、2章で基本的な考え方を紹介し、3章で教育の目的、4章で期待される教師像、5章で教育分野における戦後日本の歴史を検討するという流れで、フォス校長の教育思想を考察した。

3章の教育の目的に関しては、「自立した社会人」を養成する事で異存は無いと思われるが、そこに至る過程は多様である。社会人になるためには職業を持たねばならず、そのためには職業教育が必要になるが、欧州が早期に職業教育を始めるのに対して米国・日本は一般教育を優先する。それが日本では受験競争に結びついている。フォス校長が中等教育で重視するのは家庭における自立教育である。これは「日本の父へ」と「日本の父へ再び」という著書の趣旨から分かる通り父親の役割を期待している。

以上の自立した社会人を養成するという教育の趣旨とは別に、教育を権威・権力・組織に役立てることを目標とする状況も存在する。国家に役立つことを目標にする場合は、占領軍が強く否定した戦前の日本の教育を振り返る必要がある。戦後の保守勢力は、戦前の教育に戻す意向があり、それが戦後の民主的教育と対立し、その状況が現在も継続している。

第4章の期待される教師像、要するに理想の教師像であるが、中教審が答申するような抽象的な理想の教師は現実には存在しない。むしろ具体的な優れた教師の事例から解答が得られると思われる。問題はサラリーマン化した教師に使命感を持たせることであるが、受験教育が教師をサラリーマン化させている状況を職業大時代の高校訪問から印象付けられたことを述べた。

要するに受験教育が自立した社会人の育成という本来の教育を歪め、偏差値のような尺度で評価することがルーチン化され、組織に順応するサラリーマン教師を育成している。そのような背景を認識した上で、状況を変革するような自律的な教師を育成する必要がある。

第5章の「教育分野における戦後日本の歴史」は、占領軍による戦後の教育改革を紹介し、栄光学園の創立もその一環であったことを紹介した。さらに創立当時の栄光学園の

雰囲気と文化を、丹沢の栄光ヒュッテ建設を支援した丹沢ホームの経営者のエッセイを紹介した。

日本の民主化政策により教員による労働組合として日教組が組織化されたが歴史的な経緯から衰退した状況を述べた。フォス校長は自筆メモで日教組を強く批判しているが、その批判は必ずしも的確ではなかったと感じる。文部省と日教組の対立は、東西冷戦における政治状況を反映しているが、この対立を弁証法的に止揚できなかったことが戦後の日本の教育の失敗であり悲劇であった。最後にその状況をデイヴィッド・リースマンの孤独な群衆の視点から考察を試みた。

6.2 フォス校長の立場と業績

以上の教育の目的、期待される教師像、教育分野における戦後日本の歴史におけるフォス校長の立場と業績を考察する。教育の目的に関しては、フォス校長は自立の重要性を強調する。これは炭鉱夫であった父親の言葉が発端であるが、日本で中学の校長となることを命じられ、敗戦に打ちひしがれた日本の若者に伝承すべき価値観として栄光学園での実践を通じて培ったと思われる。自立の価値観は、リースマンの孤独な群衆が述べている社会的性格の自律型に対応する概念である。リースマンは自律型を、現状の社会に対する問題や批判を認識して、より良い社会の実現を指向する性格と捉えているので、フォス校長の自立への価値観は将に社会変革を目指すものであったと思う。

期待される教師像に関して、フォス校長が問題にするのは使命感に欠けるサラリーマン教師である。教師をそのようにさせる背景として、労働者的な価値観を取り上げて日教組を強く批判している。さらに教師の使命感や熱意を失わせる背景として受験教育が存在し、それが日本の家庭で重視されることにより子供を甘やかす問題が生じている。その状況をフォス校長は盆裁造りに譬えているが、これは適切な比喩と感じる。

教育分野における戦後日本の歴史に関しては、先ず終戦直後の占領軍による教育改革が挙げられる。これは戦前の国家主義的な教育を否定し、平和国家を目指す民主的な教育体制を創ることを目指すものであった。栄光学園自体、占領軍からの勧めで軍国の象徴とも言える旧海軍の軍港跡に設立され、その発端に関してはフォス校長によるデッカー大佐との出会いが素晴らしいエッセイになっている。設立当初の栄光学園の教育に関しても、規律正しさに支えられながら教師との和やかな交流が世間的にも評判になり、自立精神を強調したフォス校長の教育思想が実践されていたことを示す。

日本の独立後の文部省と日教組の対立は、戦前の国家が管理する教育への回帰を目指す強引とも思える政府・文部省の教育政策により、日教組は衰退した。だが中教審が答申し、政府・文部省が期待するような教師は登場しない。そもそもそのような抽象的な優れた教師を期待すること自体に無理がある。フォス校長も日本の教育政策を戦前の「国家」という言葉を「社会・経済」に置き換えただけで自筆メモに記していることは繰り返し述べたが、以上のような国や中教審の方針には否定的であったことは明白である。

他方、栄光学園は受験校として有名になり、フォス校長の教育事業家としての手腕が発揮され、社会的にも高い評価を得ているが、それは当初の栄光学園が指向した厳しい躰

に基づき自らを鍛え、自立を通じて社会貢献する人材の育成とは異なるものに変質したように思われる。自筆メモ自体が、戦後の日本の教育の中でいつの間にか有名受験校になってしまった栄光学園のあり方を再度模索しているように感じられるのである。

6.3 残された課題

フォス校長が模索したその後の栄光学園のあり方は、日本におけるカトリックミッションスクールの展望とも言える。それは図1に示した「異文化と教育」のカテゴリであり日本におけるカトリック教育の展望として、自立より受験という日本の教育の問題の克服を模索すると感じられる。そのために教師のチームワークで自立教育を目指すような運営手法や、小学校と中学校のカリキュラムを連携させて英語教育で特徴を出す方法などのアイデアがフォス校長の自筆メモには記されている。最終的には、肩書や学歴でない優れた良い人間の育成を目指すことが栄光学園をはじめとするカトリックミッションスクールの展望として語られている。これらの件に関しては、次の機会に検討したいと考える。

6.4 デジタル人文学の役割

画像電子学会で教育者の活動やあり方を論ずるのは異色と思われるが、デジタル人文学はそのような学際的な分野を開拓する新しい領域である。日本社会にある種の閉塞感が漂う状況で、新たな模索が行われる必要があるのではない。特に生成AIが登場し、既存の記録情報の照合や、それらに基づく論理展開などが進展すると、従来の人文学分野をはじめとする文系の分野は生成AIに対して対抗できなくなる懸念すら存在する[24]。そのような観点で、人文学をはじめとする従来の文系分野を、論理的文脈ではなく視聴覚を活用する人間的な感性で体系化していくことが重要な課題と思われる。その観点で、画像情報や映像情報の活用を人文学分野に生かすことが今後の重要な課題であろう。

栄光学園創立者の自筆メモは、栄光学園同窓会のアーカイブチームが、退職された教員の資料の整理を行っている際に、私が偶然にそれを発見し、分析する機会を頂いたので[1][2]、それに基づいて今回考察を試みた次第である。画像電子学会における従来の研究手法とは若干異なるものであるが、このようなアーカイブ資料を分析する試みが今後の社会では必要ではないかと思われる。古きを温め新しきを知るという温故知新の試みであるが、デジタル人文学は、このような学際的な新たな試行を包含する分野である。

7. おわりに

以上、フォス校長の自筆メモを発端に、フォスさんが教育者として活動した日本の戦後教育に関して、教育の目的と期待される理想の教師像を中心に検討したが、巨大な課題に対してのささやかな分析にすぎない。

現状の日本の教育を考えると、フォス校長がボンサイ育成に比喩した受験教育が依然として継続し、本来の教育を歪めている。さらに文科省が管理統制する教育が戦前のように推し進められている状況が存在するが、これはフォスさんが自筆メモの中で戦前の国家のための教育の「国家」を「社会・経済」に置き換えたに過ぎないと指摘している状況に符合する。

以上から分かる通り、フォス校長は戦後の日本の教育に対しては、かなりの確かな視野を有していたことが認識できる。なお、日教組の問題をはじめとする政治的な問題に関しては、必ずしも妥当とは言えない感もあるが、この問題はカトリックミッションスクールの展望と併せて次回に考察したい。

最後に本稿を執筆するに当たり、栄光学園同窓会アーカイブチーム責任者である青木嘉光様から勇気付けられるコメント・アドバイスをいただき感謝します。さらに栄光学園同期の桂勲様、2年後輩の森山民雄様から貴重な情報を提供頂きましたので御礼申し上げます。

文献

- [1] 大野邦夫, "栄光学園創立者による自筆メモの分析と考察", 2021年度画像電子学会年次大会講演論文, Aug. 2022.
- [2] 大野邦夫, "栄光学園創立者による自筆メモの分析と考察(2)", 画像電子学会第4回デジタルミュージアム・人文学研究会資料, Dec. 2022.
- [3] 大野邦夫, "オブジェクト指向プログラミングによる意味的クラス継承に関する考察~造り酒屋オントロジモデルの検討から得られた可能性と限界~, 情報処理学会研究報告, DC116-5, 2020.3
- [4] グスタフ・フォス: "日本の父へ", 新潮社, p.17, 1977.
- [5] 新約聖書, "テサロニケの信徒への手紙3.10", 共同訳聖書実行委員会, p. (新) 443, 1987.
- [6] 新約聖書, "使徒言行録 18.3", 共同訳聖書実行委員会, p. (新) 289, 1987.
- [7] グスタフ・フォス: "日本の父へ", 新潮社, p.18, 1977.
- [8] Mitsuko Okuda, "Connection of Falling Student to Society ~ Focusing on the Efforts of Summer Academy in Germany", Proc. 7th Image Electronics and Visual Computing, Sep. 2021.
- [9] パートランド・ラッセル (安藤貞雄訳), "教育論", 岩波書店, pp.50-52, 1990.
- [10] パートランド・ラッセル (牧野力訳), "中国の問題", 理想社, 1970.
- [11] デイヴィッド・リースマン (加藤秀俊訳), "孤独な群衆", みすず書房, 1964.
- [12] グスタフ・フォス, "日本の父へ再び", 新潮社, 1987.
- [13] 鲁迅 (駒田信二訳), "阿Q正伝・藤野先生", 講談社, 1998
- [14] ドナルド・キーン (角地幸男訳), "私と20世紀のクロニクル", 中央公論, pp.47-50, 100-102, 2007.
- [15] 永井道雄, "異色の人間像", 講談社, 1965
- [16] グスタフ・フォス, "日本の父へ再び", 新潮社, p.44, 1987
- [17] ジョン・ダワー, (三浦陽一, 高杉忠明訳), "敗北を抱きしめて~第二次大戦後の日本人(上)", 岩波書店, 2001.
- [18] ジョン・ダワー, (三浦陽一, 高杉忠明, 田代泰子訳), "敗北を抱きしめて~第二次大戦後の日本人(下)", 岩波書店, 2001.
- [19] 中村芳男, "栄光とわたくし", 栄光学園山岳部誌, いろり, 栄光山小屋特集, 1957.7.14, pp.6-7, 1957.
- [20] 石川達三, "人間の壁(上・中・下)", 新潮文庫, 1958~59
- [21] アンドレ・レノレ (花田昌宣, 斎藤悦則訳), "出る杭はうたれる", 岩波書店, 1994.
- [22] Wikipedia, "日本教職員組合", <https://ja.wikipedia.org/wiki/日本教職員組合>, Aug. 2022.
- [23] 大野邦夫, "ドキュメント文化と社会的性格~D・リースマンの思想に基づく考察", 情報処理学会研究報告, DD63-9, Sep. 2007.
- [24] 大野邦夫, "デジタル人文学の可能性に関する考察~大規模言語モデルの登場による学際的分野の革新", 2023年度画像電子学会年次大会講演論文, Aug. 2023.